

生殖医療と家族援助

家族形成のための支援カウンセリング

～「子どもの出自」を問うということ～

荒木晃子

ことばの刃

前号の終わりに記述した以下の仮説がその後脳裏から離れず、今号に至る。

「親が自分を産むためにドナー女性を犠牲にし、その身体を傷つけた。選択した(不妊)治療のせい(原因)で、世論の批判を浴び、結果自分が生まれたことが(社会)問題になった」

うえは、今年、“ドナーからの提供卵子”で子どもが誕生したことへの世論を、その子が成長した後知り、感じる(かもしれない)心情を危惧した仮説である。

筆者はいま、自然生殖を“善し”とし、生殖医療による妊娠を否定的にとらえる論者に対して、反対に問うてみたい思いに駆られている。「あなたの子どもの配偶子は、誰と誰のものですか。その子を、何処でどの様にして妊娠したのですか。」と。現状、日本国内で、返答によっては“意見されるかもしれない我が子の出自”を問われるのだと感じた際、迷うことなく答える勇気を筆者は持たない。

果たして、見ず知らずの他人に、先のように尋ねられたら、あなたはどうか感じるだろう。ある人は、失礼だ！と怒りを覚えるかもしれないし、また人によっては、プライバシーの

侵害ですと、反対にそれを問うた人を叱咤するかもしれない。他にも、日常の生活空間で共に生きる、ある一握りの人達の存在を忘れるわけにはいかない。その人達とは、目を伏せ、何も答えずその場を立ち去る、もしくは言葉を濁し真実を語ることを拒む人たちをいう。国内で、里子、養子の他に、不妊治療で生まれた子どもを育てる親たちは、その瞬間、たとえ表面上は冷静に対応できたとしても、少なくとも平常心でいることは難しいだろう。実際には、里親・養親となり子どもを育てる親以外にも、2015年までに体外受精で生まれた“48万人超の子どもの親たち”が、その“一握りの人たち”に相当する。

「子どもの出自」を問う社会

生殖医療施設に通院する不妊当事者は、自分たちに残された可能性に対し、医療者から提示される新たな治療に望みを託すのが通常である。しかしながら、未だ社会に容認されていない医療手段を用いて、幸運にも、妊娠/出産し我が子を胸に抱く喜びを得た当事者カップルには、必ずと言ってよいほどその見返り(?)が付きまとうといっても過言ではない。選択した新たな生殖医療技術(=子どもが誕生するまでの一連の医療行

為)を否定する論客が現れ、彼らの意見を様々なメディアがトピックスとして取り上げ、専門家の意見として紹介するのはよくあることだ。生殖医療を肯定的に捉える社会とは言いがたい現状で、子どもの誕生までのプロセスの善し悪しを、例え専門家とはいえ、当事者以外が評価することは、果たして道理にかなう行為なのだろうか。ましてや、すでに結果として、子どもが生まれているのである。生殖医療で妊娠/出産することを肯定できないことは、子どもの誕生までのプロセスの善し悪しの評価である、としか思えない筆者には、いくら考えても納得できない言動である。

確かに、婚姻関係にある異性間(=夫婦)で実施するタイミング法、人工授精、体外受精であれば容認できるとコメントする論者も存在する。彼らは、生殖医療技術についての知識を得たうえで評価していると推察するが、結局のところ、～は善くて～は善くないと評価することに変わりはない。また、精子、卵子、受精卵の提供や、代理母による懐胎といった「夫婦以外の第三者が関わる生殖医療は容認できない」とする論者が示す様々な根拠は、いずれも、いまひとつ説得力に欠けるものにしか思えない。なかには、すでに起きた問題を一例として、「このような問題が起きるから禁止」といった一見短絡的にも思える理由や、「日本の伝統的家族観が損なわれる」、「家族に混乱を招く」等の漠然とした理由を根拠にあげる者もいる。筆者にはそれらは全て、生殖医療を否定するための理由付け、もしくは、問題や責任を回避するための“そもそも論”にしか思えないのである。

人が起こした問題は、人知を結集して解

決すればよい。たとえ医療であっても、家族問題であっても、そこに起きた問題の解法を探り、次は起きぬようそのシステムが変化するために努力を惜しむべきではない。そこに起きた問題は、過去の結果としていま表出した、未来への課題と考えるべきなのではないのか。ここで、「自然に子どもが授からないカップルが、誰かの/何らかの手助けを得て、何としてでも子どもを授かろうとするから問題が起きるのだ」と考える方々にご一考いただくために、次にあげる、生殖医療で生まれた子どもたちの声を届けたい。

評価が児に与える影響

生殖医療による妊娠・出産を否定的にとらえる言論は、結果として、不妊治療で産んだ/生まれた人々を否定することにつながるのではないか。本稿の執筆が始まって以降、このような懸念が頭から離れない。これは、これまでに講義や講演会などで生殖医療に関する話をした際、それを聞いた参加者から筆者に届いた感想やメッセージから感じるものでもあった。以下はその一部である。

・「私は体外受精で生まれた子どもらしいです。母は、どうしても自分で生みたかったといいますが、私は体外受精で生まれてきてもよかったのでしょうか？」

・「出来婚で3人の子どもを産んだ妹のときにはわからなかったのですが、姉の私は遅くに結婚したため子どもができず母に相談すると、「あなたは不妊治療で生まれたのよ」と言われました。不妊治療で生まれた私は、やはり不妊治療でしか子どもを産むことができないのかと不安です。ちなみに、自然妊娠で子どもを授かった妹も不妊治療で生まれたらしいです」

・「私の両親は離婚し、現在は母子家庭です。以前、大学進学のため、別居する父親に資金援助を頼むと「お前は実の娘ではない」と援助を断られました。驚いて母を問い詰めると、父が不妊症のため不妊治療病院で妊娠させてもらったといいます。両親の離婚原因は私だともいわれました。このことは誰にも相談できません。私は、生まれてきてはいけない人間なのではないでしょうか？」

ちなみに、この3つのメッセージは、筆者の話聞いた一般市民や高校・大学で学ぶ方々から寄せられたものの一部である。れらは、生殖医療技術が定着して以降、年々生殖医療の利用で生まれた子どもの数が増加し続けているという、日本産科婦人科学会報告とも一致する現象ではないのか。かつて生殖医療で生まれた子どもたちは成長し、今まさに生殖年齢(16才~40才)の真只中にある。彼らは、少子化問題を抱える日本にとっては、次世代の担い手でもある。

ARTで生まれた子どもたち

今から34年前、1983年に国内初の体外受精(ART)児の誕生が報告され、その2年後以降、毎年、日本産科婦人科学会がARTによる出生児の統計を取り現在に至る。最新(2017年11月時点)の報告によると、2015年までに体外受精関連技術で累計482,627人の子どもが誕生しているという。以下は、公益社団法人日本産科婦人科学会登録・調査小委員会2017年9月報告である。次に示す図表と、厚生労働省のホームページで公開している国立社会保障人口問題研究所「第15回出生動向基本調査」(2015年6月)を対比した結果が興味深かったので紹介する。

総出生児数に対するART出生児の占める割合

西暦	ART出生児数	総出生児数	(%)
97	9,211	1,191,665	0.77
98	11,119	1,203,147	0.92
99	11,929	1,177,669	1.01
00	12,274	1,190,547	1.03
01	13,158	1,170,662	1.12
02	15,223	1,153,855	1.32
03	17,400	1,123,610	1.55
04	18,168	1,110,721	1.64
05	19,112	1,062,530	1.80
06	19,587	1,092,674	1.79
07	19,595	1,089,818	1.80
08	21,704	1,091,156	1.99
09	26,680	1,070,035	2.49
10	28,945	1,071,304	2.70
11	32,426	1,050,806	3.09
12	37,953	1,037,231	3.66
13	42,554	1,029,816	4.13
14	47,322	1,003,532	4.72
15	51,001	1,005,677	5.07
累積出生児数	482,627		

上の表は、1997年~2015年までに国内で生まれた年間総出生児数に対するART出生児数の占める割合である。はじめに、赤いラインの上段をみると、1999年の総出生児数1,177,669人に対して、ART出生児数は11,929人と全体の1.01%が体外受精関連技術で生まれている。その後、05~07年にかけて、その割合は横ばいを示すも、その時期を含めART出生児数はその後も年々増加を続け、2015年(赤いラインの下段)には、年間総出生児数1,005,677人に対して、ART出生児数51,001人となり、全体の5.07%を占めた。実に一年間に生まれた子どもの19.7人に一人が体外受精関連技術で生まれている。

表記されている最近18年間の累計を見ても、近年、喫緊の課題とされる少子化問題は明らかである。2011年以降も減少を続ける中、2015年の総出生児数は前年より2,138人増加し、5年ぶりに増加に転じたものの、同年のART出生児数は、前年より3,679人増加している。このように、人口減少に反して、ART出生児数が増加するこの現実、目を向けようとしない世論の狭間に、ARTで生まれた子どもたちが暮らしていることを忘れてはならない。